

『三国演義』の言葉と文体

— 中国古典小説への計量的アプローチ —

上 田 望

1. 序

20 世紀末からさまざまな中国古典小説のテキストデータベースが構築され、瞬時に用例を検索できるようになっている。また『三国演義』などのように多くの版本を電子化するプロジェクトもあり、すでに版本の比較などに絶大な威力を発揮している。

筆者もかつて、机の上に多くの版本のコピーを並べて比較する作業に取り組んでいた時期があったが、今は版本の種類こそ限られているものの、版本の字句の異同をコンピューターが検索してくれる。異体字をどのように処理するかという厄介な問題や、文字入力が不正確で学術研究の基礎資料としては信頼できないという批判的な意見もあるが、これは今後、努力して是正していけばいいのであり、21 世紀において研究者の電子テキストへの依存度がますます高まることは間違いない。

しかし、一方で私たちは一つの曲がり角にさしかかっているようにも思える。それはこれから増え続ける中国語文献の電子テキストをどのように扱えばよいのだろうかという問題である。今はとにかく電子テキストを量的に拡大していくことが先決であるとする考えも汲むべきものがあるが、そろそろどう利用するかについて学界を挙げて真剣に検討すべき時期にきているのではないだろうか。日本で活発な活動を展開している漢字文献情報処理研究会や、中国の中国古代小説デジタル化研究会なども、こうした問題意識と無縁ではなからう。筆者はこれについてちょっとしたアイデアを提起したことがあるが（注 1）、この小論では、『三国演義』の電子テキストから語彙、語形を検索するシステム（Grammatical Pattern Scanner for 三国演義）及び統計処理ソフトウェアを利用し、語彙や語形の面から具体的に新たな研究の試みをおこなっていく（注 2）。

筆者は以前から個人的に、『三国演義』という作品の創作を羅貫中という一個人の功績とし、また、その完成時期を元末明初とする小説史上の定説に強い疑問を抱いていた。『三国演義』は一つの完成された小説テキストとして認められ、清の毛父子と近人の沈伯俊氏を除いては、現在に至るまで誰もその文章に加筆修正しようとはしなかったが、「文体」としては不均質であるように見えるからである。小論ではこの文体上の不均質性を上記の手法によって掘り起こし、最終的にこの小説を集大成した人物の「文体」とはどのようなものか、そして小説の成立時期、成書過程についても論じていきたい。

2. 研究史と問題意識

白話の語彙や語形、文字などに着目し、パソコンを利用する計量分析的手法によって中国古典小説の作者や成書過程を考察する研究は『紅樓夢』研究の分野から始まっている。アメリカの周策縦氏に拠れば、1960年代にはウィスコンシン大学に集まった若手研究者たちがすでにこうした研究に着手し、その成果の一端は1980年に開催された第1回国際『紅樓夢』研究会において公表された陳炳藻氏の「從字彙上の統計論《紅樓夢》的作者問題」に伺うことができる(注3)。こうした研究の流れは更に統計学の専門家、李賢平氏によって引き継がれ、李氏は『紅樓夢』中の虚詞の出現頻度についてクラスタ分析などの統計的手法を用いて、第1回から80回の前半部と第81回から120回の後半部とで使用率が異なることを明らかにし、前半部は曹雪芹自身の書いたもの、後半部は高蘭墅が曹雪芹の原稿を加筆、修正したものと結論づけている(注4)。また、それよりしばらく後に上梓された呉競存氏を中心とするグループの研究成果『紅樓夢的語言』にも白話語彙・語形を切り口にした興味深い論考が多く収められている、その中の劉鈞傑氏の研究は、疑問の語気助詞、与／給、吃／喝、「把N説」式句など6つのパラメータ(変数)から、『紅樓夢』の前半80回と後半40回は同一人物によって書かれたものではなく、また同じ時期に書かれたものでもないとしており(注5)、小論の着想はこれら『紅樓夢』の言葉に関する先行研究から多くを負っている。

また、『水滸伝』のテキストに関しても、文体の不均質性について同様の問題が存在していた。これについて『紅樓夢』と同じように計量的な手法で先鞭をつけたのはおそらく伊原大策氏であろう。氏は、『水滸伝』の中で独立性が高いと思われる林冲故事、武松故事、征遼故事、征田虎故事、征王慶故事の本文を独力で電子テキスト化し、各故事間の使用語彙比較対照表と各故事における語彙の統計的計数表を作成し、人名、人称代名詞を除き、更にその中から副詞や介詞を中心に分析を加えた。その結果、従来は直勘によって他部分とはリズムや文体が異なると言われてきた武松故事は、他故事ではあまり用いられない語を少なからず含む上、特定の語に対する集中度が高いという点で他故事と異なること、挿増の疑いのもたれている征遼故事の文章は、挿増されたことが確認できる征田虎、征王慶故事の文章とは一致点が十分に存在しないことなど、貴重な指摘をしておられる(注6)。また、パソコンや電子テキストを用いた計量的研究ではないが、佐藤晴彦氏は『水滸伝』の異体字に着目し、容與堂本『水滸伝』の方位詞、語気詞の“li”の使用状況から、〈裡〉が多く使われている回が最後まで作者が手を加えた水滸を代表する故事群であり、明洪武年間にしか用いられなかった語気詞“俚”を含む回の故事は、洪武年間にはすでに文字化されていた水滸説話ではなかったかと論じている(注7)。このほか、小松謙、高野陽子両氏の近年の研究では、『水滸伝』の人称詞、指示詞、疑問詞や特殊なテクニカル・タームを手がかりに、「まず第35回ごろに第一の変化が生じ、第60回ごろを境に更に大きな変化が生まれ、第70回以降は完全に性格が変わる」としている。特に『水滸伝』の第75

回以降が『三国演義』などのような歴史小説の文体に近く、最終的にまとめた作者が、梁山泊物語に結末をつけるために人工的に作り上げたものであろうと推論している点は興味深い（注8）。

一方、『三国演義』に関しては、最近までこうした研究はあまり大きな進展が見られなかった。しかしながら、銭玄同氏は遙か昔に上海亞東図書館版『三国演義』の序（注9）で「有時用狠隱晦的古文詞類，有時用狠淺顯的白話詞類（意味の捉えにくい古文の語彙を用いているかと思うと、極めて俗な口語の語彙を使い）」、「這部書的文體，是龐雜不純的（この小説の文体は統一がなく純粹さに欠けている）」と述べ、『三国演義』の中で古文／白話という2つの位相を異にする言葉が混在していることを指摘している。ちなみに銭玄同氏は『三国演義』のこのような半文半白の文体を、文語文学から口語文学に移行する際の過渡的段階のものとして、それなりの肯定的評価を与えている。これに対して香坂順一氏はやはり今から四十年も前に『三国演義』の「ことば」という論文の中で、おもな武将の会話はほとんど文語調で書かれ、庶民・兵士・女性の会話には口語、口語調の言葉が用いられていることを明らかにし、このように意識的に文語と口語を使い分けた文体を「演義体」と呼んでいる。更に氏は「ある個所ではまとまって突如として口語・口語調の文章がみられるが、これはこの本の成立という別の面から検討してみなければならない」という重要な問題提起をしているが（注10）、この点についてはその後、氏を含め残念ながら長い間、研究されなかったようである。

ただ、文語の部分に関して言えばいくつかの論考が出ており、たとえばボリス・リフチン氏は四字句が『三国演義』の戦闘場面などで決まり文句として用いられていることについて『三国志平話』と比較しながら詳細に考察し、中川諭氏や筆者は『資治通鑑』や『資治通鑑綱目』など難解な文言の歴史書の引用が何の加工も施されることなく、そのまま小説にはめ込まれているという事実を明らかにしている（注11）。

また近年、新しい研究の萌芽が出てきており、竹内真彦氏は『三国演義』の中で「関公」「公」の呼称が用いられる個所が、関羽の「千里独行」と「麦城昇天」に集中していることから、この二者は後から組込まれた物語であったとし、従来考えられていたほど『三国演義』はきちんと文体が統一されたテキストではないことを強調している（注12）。

筆者は、この竹内氏の指摘は『三国演義』研究史上において意義のあるものと考えているが、そうだとすれば、この一連の関羽故事に、関羽の呼称以外にも顕著な語彙、語形上の特徴があるのではないか、また関羽以外の英雄たちの物語—たとえば孔明、呂布、趙雲などが外部から『三国演義』に織り込まれた痕跡を語彙、語形の点から見出すことができないか、そしてこのような英雄物語をつなぎ合わせて長篇小説に仕立て上げた作者独自の「文体」にはどのような特徴があるのか、『三国演義』のどの部分にその「文体」が多く用いられているのかなど、まだまだ疑問の種は尽きず、これらについて以下、取り組んでいくことにしたい。

3. 研究手法と本論

上記の問題意識にたつて考察を進めていくために、小論では、①首都師範大学の周文業氏を中心とするプロジェクトチームによって作成された『三国演義』の8種類のバージョンの検索プログラムの中に含まれる、嘉靖本、周曰校本（以下、周本と略す）、李卓吾本、葉逢春本（以下、葉本と略す）、黄正甫本（以下、黄本と略す）、毛評本の6種類の電子テキストデータ（注13）、②筆者が専門家に委託して開発してもらったソフトウェアで、6種類の電子テキストデータから各バージョンのどこの回にいくつの用例があるか、また則ごとの出現回数、出現率などを瞬時に計算しグラフ化してくれる検索システム「Grammatical Pattern Scanner for 三国演義」（PLATEA.Inc 以下「GPS」と略）、③市販されている自己組織化マップ作成用の統計解析ソフトウェア（Viscovery SOMine）、などを利用し、

- 1) 『三国演義』の特定の箇所、物語に多く出現する宋元時代の語彙、語形
- 2) 『三国演義』の特定の箇所、物語に多く出現する明清時代の語彙、語形
- 3) 『三国演義』の前半部と後半部とで出現回数に顕著な差異の見られる語彙、語形
- 4) 『三国演義』で出現回数の多い文字
を検討していくことにする。

- 1) 『三国演義』の特定の箇所、物語に多く出現する宋元時代の語彙、語形
以下、宋元時代の語彙、語形について白話、文語に分けて検討していく（注14）。

<白話>

・【下落】嘉靖本には6例。葉本に3例、黄本に5例。目的語として用いられ、動詞はすべて「知」である。用例は千里独行（第50則、第55則②、第56則）と長坂坡（第82則②）の段にのみ見える。宋元の口語文学では元雑劇（「後庭花」などいずれも三国物ではなく、動詞も「知」ではない）などに用例がある。明清の小説には『西遊記』や三言を始め、『平妖伝』に12例、『水滸伝』に9例、『北宋志伝』に少なくとも6例ある。また『明史』以前の正史にこの用例はない。『朱子語類』には多くの用例があるが、「落ち着く」という意味での動詞の用法が多い。名詞「落ち着き先」という意味で動詞「知」の目的語となる使い方は明代のものではないか。

・【去處】「去」という動詞の意味が軽くなり、「地方」という意味で用いられているものは嘉靖本に24例ある。呂布の物語、古城聚義、七擒孟獲など用例の箇所は多岐にわたる。葉本には20例。会話の中で用いられるものがほとんどである。嘉靖本の中での分布に若干、偏りがあり、第57則から第98則の間が0例、第181則から第229則の間も用例はない。一方で第140則から第143則の漢中攻略戦には6例も集中している。古くは『東京夢華録』や『元朝秘史』に用例が見え、『五代史平話』、元雑劇、『宣和遺事』など明以前にも「地方」（場所）という意味の『三国演義』に近い用例が見えるが、多く使われるようになったのは明以降のようであり、『平妖伝』に26例、『水滸伝』に30例となっている。

『三国志平話』には1例（「今無去處」）、『武王伐紂平話』には3例（「客館不見姜尚去處」「知汝去處」「便知去處」）あるが、いずれも「去」が動詞としての意味を残している。

・【**辱没**】嘉靖本に1例。「辱莫」「辱末」などと書く場合もある。『三国志平話』には用例がないが、元雜劇を含む宋元の口語文学には用例がある。

俺哥哥大漢皇叔，也不辱没嫂嫂 第121則 張飛の白

・【**會：助動詞・動詞**】「會」には多くの意味があり、『三国演義』の中でも出現回数はかなり多いが、動詞の前に置かれる助動詞「～ができる」の用例は5例、「習熟、通曉している」という動詞の用例も5例しかなく、決して多いとは言えない。『中国語歴史文法』に拠れば、助動詞としての用例は宋代あたりから見え、『朱子語類』などの用例が挙がっている。『三国志平話』には「軍師又説、有天地、三人而會祭風。」「乃是武侯親筆寫來、言、“自古將材、無五人會造木牛流馬。”という例があるため、『三国演義』の助動詞の用例5例のうち、第204則の2例はおそらく『三国志平話』から影響を受けたものではないかと考えられる。また第226則の2例についても「能」との対比で「會」を使っただけであるとすれば、羅貫中はこの助動詞的用法を好まなかったと言えるであろう。動詞的な用法も4例のみで特定の則に集中していることから、これも羅貫中の筆にかかるものではないと想像される。

一个姓鮑，名隆，都是桂陽嶺山鄉獵戶出身。陳應會使飛叉，… 第104則 助動

雲長急閃，又無箭。只作黃忠不會射，放心趕來，將近吊橋，… 第105則 動

皆死於水中。其會水者亦無去路，其投降者不下萬餘。 第148則 動

蒙拜謝，點兵三萬，快舡八十餘隻，會水者皆穿白衣，扮作商人，… 第150則 動

傳令曰：“孔明善會八門遁甲，能驅六丁六甲之神，… 第201則 動 司馬懿の白

懿喜曰：“汝既會用此法，吾何不用之？”… 第204則 助動 司馬懿の白

不數日，人報説魏人也會造木牛流馬，往隴西搬運糧草。 第204則 助動

乃與二子曰：“孔明善會六丁六甲遁法，… 第208則 動 司馬懿の白

艾笑曰：“汝只道此陣汝師傅能布，天下人豈不會布也？ 第226則 助動 鄧艾の白

望大笑曰：“吾既能布之，豈不會變？… 第226則 助動 司馬望の白

・【**兀的**】嘉靖本に2例ある。元雜劇には用例が極めて多いが、『三国志平話』にはない。

飛把手一指：“兀的不是軍馬來也！” 第55則 千里独行 張飛の白

小童曰：“與襄陽龐德公、龐統爲友，兀的那林中便是莊也。 第69則 童子の白

・【**委實**】嘉靖本、葉本には長坂坡の場面の1例。しかし、黄本や周本には第52則の千里独行の枕で用いられている。元雜劇には用例は豊富で『三国志平話』にも1例ある。明清の小説には『水滸伝』が5例など用例は多くない。

妾身委實不去也，休得兩誤！” 第82則 糜夫人の白

兄今委實有在河北。 第52則（黄本と周本のみ） 關羽の白

・【**半點**】嘉靖本には7例ある（第29則、第82則②、第159則、第162則、第172則、

第 224 則)。就中、長坂坡の場面に 2 例あるのが目を引く。唐宋詩に用例があり、元雜劇や『永樂大典戲文』にも用いられているが、『三国志平話』には用例がない。明清の小説でもそう多くは用いられていないが、『水滸伝』には 27 例ある（“儿化”した語を含む）。

・【**好生**】 嘉靖本では 9 例ある。宋元の口語文学には『五代史平話』や元雜劇にまとまった数の用例があるが、『三国志平話』には用いられていない。明代の小説では『平妖伝』に 19 例、『水滸伝』に 50 例以上とかなり大量に用いられている。『三国演義』では第 148 則以降、まったく使われていない。

曹操出馬，大叫：“逆賊！遷天子，徙百姓，好生都留下！” 第 11 則 曹操の白
布同郡騎都尉李肅，近日好生怨卓不與昇用，令布說此人去，卓必不疑。 第 17 則
卻說呂布見王則說曹公相敬之意，好生重待。 第 32 則

廖化問起根由，好生拜敬，杜遠不從，已被廖化殺之。 第 53 則

教扶雍上馬，令跟隨之人盡脱衣甲，好生扶侍而去。 第 82 則

國太親自要見，好生在意。玄德與趙雲、孫乾商議，… 第 108 則

國太好生病重，旦夕只是想念夫人，… 第 121 則 周善の白

休要驚恐，好生換那幾箇百姓來。 第 139 則 張飛の白

我若被他所殺，汝好生看養吾兒，… 第 147 則 龐徳の白

・【**只管**】「ひたすら」という意味での用例は嘉靖本に 6 例（葉本では 3 例）ある。宋代に早くも出現し、『五代史平話』や元雜劇などに用例がある。また明代の小説でも『平妖伝』に 21 例、『水滸伝』に 7 例などいくつかの用例が見られる。

關公自思想：“呼我字者，必不是害吾之人。”遂教車仗從人只管大路緊行，… 第 53 則
方今天下未定，休只管哭而廢大事。 第 58 則 張昭の白

孔明曰：“汝只管打來。” 第 200 則 孔明の白

三將不能相顧，只管亂撞，但見愁雲漠漠，… 第 200 則

郃生性急暴，只管追之。 第 202 則

玄德是我妹夫，只管遷延不還，… 第 112 則 黄本、葉本のみ 孫権の白

淵曰：“若待他人建了功勞，吾與汝何顏見魏王乎？汝只管守寨… 第 141 則（黄本、葉本のみ） 夏侯淵の白

・【**險些**】「險不」の方が古いかたちで、徐々に「險些」に変わっていったとされる。嘉靖本では 2 例あり、千里独行（第 54 則）と興兵伐呉（第 165 則）に該当する。黄本では、趙子龍磐河大戦（第 13 則）と華容道（第 100 則）にある。元雜劇、『永樂大典戲文』から『平妖伝』、三言、『兒女英雄伝』に至るまで多くの作品に用例がある。

班看畢，嘆曰：“險些誤害忠良！” 第 54 則 胡班の白

被馬忠一箭射中肩窩，險些兒落馬。 第 165 則

瓚曰：“若非三位救助，險些受害。” 第 13 則（黄本のみ） 公孫瓚の白

操曰：“險些與你不相見矣！” 第 100 則（黄本のみ） 曹操の白

・【**便了**】句末の助詞で「就是」という意味の用法は嘉靖本に 12 例ある。第 151 則以降には用例がなく、またほとんどが会話の中で用いられている。古城聚義、博望燒屯、赤壁鏖兵、單刀会など有名な物語に多く見られ、最後の用例は関羽が骨をえぐる治療をうける場面である。元雜劇や『水滸伝』に同様の用例が見られる。

・【**A 也不 A**】「A か、それとも A でないか」という用例は嘉靖本には 7 例あり、この語形は敦煌變文に早くも見られる。

看他起也不起！ 第 75 則 三顧草廬 張飛の白

我們且看他的計應也不應 第 78 則 博望燒屯 張飛の白

肅乃來見孔明，看他知也不知。 第 89 則 赤壁鏖兵 周瑜の白

子敬試以言釣之，看他知也不知 第 90 則 赤壁鏖兵 周瑜の白

看吾斬將，老也不老！ 第 165 則 劉先主猇亭大戰 黃忠の白

今番服也不服？ 第 172 則 魏主伐吳 徐盛の白

看丞相羞也不羞！ 第 199 則 四出祁山 陳式の白

<文語>

・【**沙場**】嘉靖本には 5 例あり、唐詩や正史に見られる語彙であるが、宋元の口語文学には元雜劇を除いては用例を見ない。明清の小説では三言に用例がある。『三国演義』で用いられる場面は千里独行や長坂坡の段など有名どころが多く、しかも前半部に集中している。一方、これとほぼ同義の「戰場」という語彙は第 102 則以降に出現する。

洪用拖刀背砍計，轉身一蹶，砍中何曼，再一刀中腿，遂死沙場。 第 24 則

死戰沙場，其名萬古不朽， 第 49 則 張遼の白

如不見，寧死在沙場上矣！ 第 82 則 趙雲の白

擲鎧甲於沙場 第 83 則 祖龍圖賦

若劉備戰死荊州沙場，夫人再不更事豪傑 第 109 則 劉備の白

・【**事故**】嘉靖本では 7 例（第 6 則、第 41 則、第 68 則、第 72 則、第 82 則、第 151 則、第 163 則）。うち、5 例が「必有事故」という形をとり、長坂坡や走麦城の物語などに多い。もともと唐代にすでに成立していた言葉であるが、宋元の口語文学では『宣和遺事』に用例があるくらいで、明代の小説でも『水滸伝』や三言に若干の用例がある程度である。

・【**健將**】嘉靖本では 13 例（第 13 則②、第 14 則、第 22 則④、第 24 則、第 27 則、第 33 則、第 38 則、第 82 則、第 115 則）。ほとんどが第 10 則から第 30 則の間に集中している。第 82 則は長坂坡、第 115 則は戰潼関、第 140 則が黃忠嚴顏双獻功の話である。『三国志平話』には 7 例あり、いずれも呂布の「八健將」として出てくる。この「健將」という語彙は『後漢書』の「呂布伝」から来ているようである。

・【**一切**】嘉靖本に 13 例（第 97 則〔祭東風〕、第 108 則〔娶孫夫人〕、第 145 則〔進漢中王〕、第 153 則〔玉泉山〕、第 180 則③〔七擒孟獲〕、第 193 則②〔再上出師表〕、第 208 則、第 209 則〔孔明之死〕、第 212 則②）。そのうち、9 例は孔明と関わりのある話で用いられ

ている。明らかに文語の語彙であるが、宋元の口語文学では『五代史平話』の5例を始め、いくつか用例がある。

2) 『三国演義』の特定の個所、物語に多く出現する明清時代の語彙、語形
以下、明清時代の語彙、語形について白話、文語に分けて検討していく。

<口語>

・【人伴】「陪伴的人」という意味として嘉靖本に8例（第53則、第54則、第55則③、第56則③）あり、すべて千里独行故事である。また葉本には1例、黄本には5例しかない。明代以降の『水滸伝』や三言には若干の用例が見られる。

・【喫了一驚】嘉靖本では6例。いずれも以下のように有名な物語の地の文で用いられている。「吃驚」なら『宣和遺事』にもあるが、このかたちでは宋元の口語文学には用例がない。『三国志平話』には「喫」を動詞として使う用例は4例あるが、「喫／驚」という組み合わせはない。『平妖伝』に31例など、明代以降の用例が多いことから、これらの物語には明代の言い回しが入り込んでいると考えられる。

卻說孔明偶來江邊，見說玄德與都督相會，喫了一驚，… 第89則 赤壁塵兵
魯肅喫了一驚。 第103則

雲長喫了一驚，帶箭回寨，… 第105則 戰長沙

國太喫了一驚。 第108則 娶孫夫人

權喫了一驚，問曰：“那里得這話來？” 第108則 娶孫夫人

原來巡哨方回，聽得這箇消息，喫了一驚，… 第121則 截江奪斗

<文語>

・【土兵】嘉靖本では1例あるのみで、周本、李卓吾本の系統にはあるが、葉本、黄本にはない。「土兵」という言葉自体は『宋史』にも見え、西北地方などで軍務に就く戦闘部隊を指したが、『明代漢語詞匯研究』ではこれを「郷兵」とし、この「土兵」の制度は明の成化年間に成立したことを考証しており、石昌渝氏は更に踏み込んで明の「土兵」制度の変遷について論じている（注15）。宋元の口語文学には用例はないが、『水滸伝』や『平妖伝』に用例があり、『水滸詞典』では「郷丁、地方性質的武装」とし、『元史』などを例文に挙げる。

關公遙望四山之上，皆是荊州土兵也，… 第152則 走麦城

・【白糧】嘉靖本にはないが、葉本にのみ1例あり、嘉靖本、周本、李卓吾本は「白米」につくる（いずれも1例のみ）。『明代漢語詞匯研究』に拠れば、明初にこの制度が制定され、明代以降の歴史書には「白糧」という文字が散見される。宋元の口語文学や明代の小説には用例は見あたらない。この「白糧」と上述の「土兵」はいずれも走麦城の場面に現れることから、この部分は明代以降に書かれたものではないかと推察される。

忽報關公有使至。接入公廳，使曰：“目今軍士缺糧，特來南郡、公安二處，取白糧十

萬，星夜令二將軍解赴軍前。… 第 151 則

・【軍政司】嘉靖本に1例（葉本、黄本にもある）あるのみである。『明代漢語詞匯研究』に拠れば、明代の軍の中で日常の軍務を司る機構のことであるらしい。正史では『清史稿』にのみ用例がある。宋元明清の口語文学には用例が極めて少なく、失検があるかもしれないが、『北宋志伝』に僅かな例を数えるのみである。

周瑜大喜，換軍政司當面要了文書，置酒相待，… 第 91 則

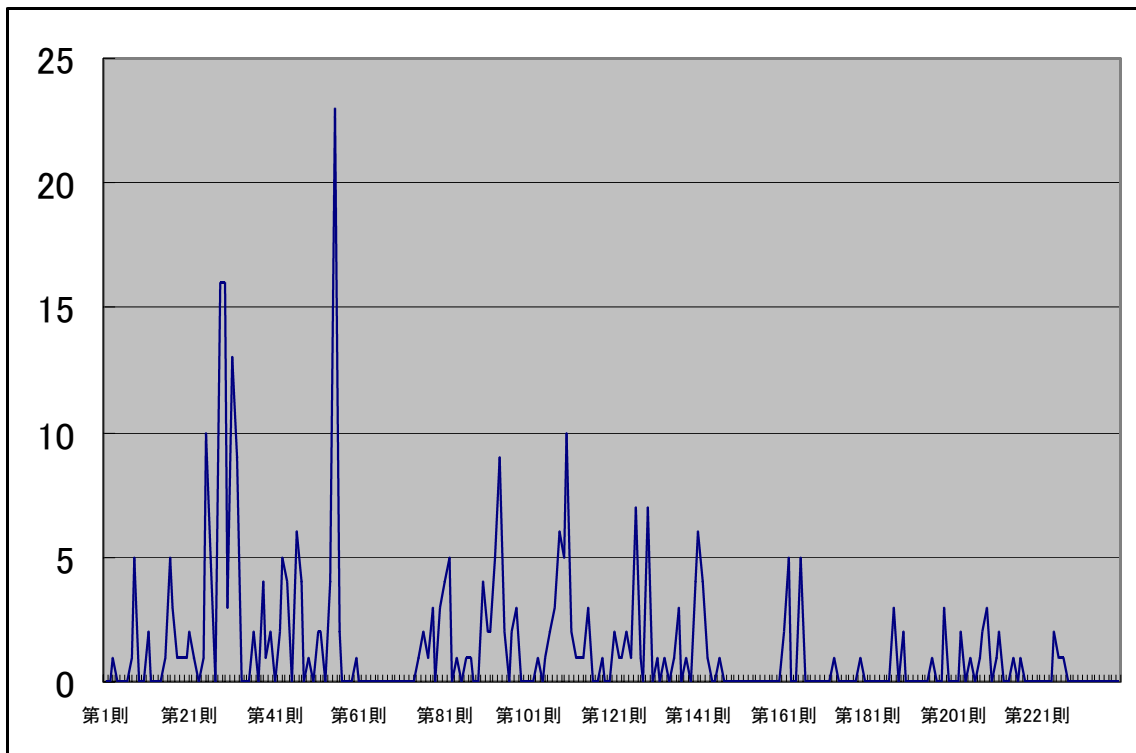
3) 『三国演義』の前半部と後半部とで出現回数に顕著な差異の見られる語彙、語形

『三国演義』の場合も『紅樓夢』、『水滸伝』など同じように分布に偏りのある語彙、語形があるが、『紅樓夢』のように明確な分水嶺を未だ見出せていないため、仮に第 1 則から 120 則までを前半部、第 121 則から第 240 則まで後半部として比較検証していく。

<前半部に多い例>

・【你】「你」は嘉靖本に 336 例あるが、前半部に 250 例、後半部は 86 例と圧倒的に前半部が多い。前半部では千里独行故事の掉尾を飾る「斬蔡陽」がある第 55 則が 23 例と最も多く集中している。「你」と対になる一人称代名詞の「我」もどちらかと言えば前半部に多く、出現回数のピークが第 55 則と第 110 則（共に 24 例）にきている。更に口語的な「俺」は 19 例しかないが、すべて第 127 則より前に出てくる。また、二人称代名詞の文語的な表現「汝」は 1507 例あるが、用例の数は前半と後半とであまり大差ない。

【嘉靖本における“你”の出現回数】



・【甚（疑問・不定）】嘉靖本では 46 例ある（「甚么」も含む）。後半が 11 例、前半が 35 例とかなり偏りが見られる。

・【喫】嘉靖本では飲む、食べるという意味の動詞の用例は 12 例あり（前述の「喫／驚」の組み合わせ 6 例は含めず）、第 135 則より前に集中している。宋元の口語文学でも「喫酒」などでよく用いられ、『三国志平話』にも「喫」を動詞として使う用例は 4 例ある。明代以降では『水滸伝』や『平妖伝』などに膨大な数の用例がある。

・【也（副詞）】嘉靖本で文中の副詞と思われる用例は 113 例あるが、分布に偏りがあり、第 91 則から第 120 則に 44 例と集中している。また第 180 則以降は 7 例しかない。「也」の語源かとも言われる「亦」は前半と後半とで出現回数が拮抗している。

・【和（介詞・共同）】嘉靖本では 30 例あり、会話、地の文両方で用いられている。分布に偏りがあり、たとえば第 55 則から第 99 則まで用例がなく、また第 177 則から最後までの間にも出てこない。興味深いのは、多くの用例が孔明、周瑜、呂布、黄忠などを主役とする物語に集中している点である。『五代史平話』や『三国志平話』など宋元の口語文学にも介詞としての用例は存在しており、特に『三国志平話』の 2 つの用例は千里独行など有名な場面にある。『三国志平話』の物語を小説に移植した際に、介詞としての「和」が『三国演義』に入り込んだ可能性は十分考えられよう。

卓尋入後園，見呂布倚戟，和貂蟬在鳳儀亭下。 第 16 則

卓曰：“吾明日和你歸鄴塢去受快樂。” 第 17 則 董卓の白

李催兄之子李別恨樊稠，見和韓遂耳語，回報其叔曰，… 第 19 則 李別の白

你來，我和你斗三百合！ 第 25 則 張飛の白

張飛躍馬橫槍而來，叫：“呂布，我和你拼三百合！ 第 25 則 張飛の白

催曰：“如今張濟兵据長安，未敢動兵，我和你合兵一處，… 第 26 則 李催の白

慈喝策曰：“你若是大丈夫，和你拼箇你死我活！” 第 29 則 大史慈の白

策取槍上馬衝殺。一千餘軍和十三騎混戰，迤邐殺到神亭嶺下。 第 29 則

只見張飛已出城外和張遼廝殺。 第 36 則

陳宮一軍和呂布軍自相掩殺。 第 37 則

汜、楷謝了，和郝萌回。 第 38 則

雲長答曰：“聽知丞相和兄飲酒，特來舞劍，… 第 41 則 關羽の白

忠曰：“我和你一般名爵，同引兵去。” 第 43 則 王忠の白

忠曰：“丞相豈和你一般。” 關公大怒，… 第 44 則

操怒曰：“先有七人，和你共八人耶？” 第 46 則 曹操の白

孟坦曰：“先將鹿角攔定關口，待他到時，小將引軍和他交鋒，… 第 54 則 孟坦の白

操見雲長勒回馬，便乘空和眾將一齊衝將過去。 第 100 則

瑜曰：“我自去和他說話。… 第 101 則 周瑜の白

卻說周瑜和魯肅回寨，… 第 101 則

先教孫乾和呂範去同見吳侯，… 第 107 則 孔明の白

玄德曰：“必須與夫人商議。”子龍曰：“若和夫人商議，… 第 109 則 趙雲の白

孔明教休追趕，自和玄德歸荊州慶喜，賞賜眾將。 第 111 則

孔明曰：“必是不曾見吳侯，只到柴桑和周瑜商量了計又來。… 第 112 則 孔明の白
酒至半酣，和松和兄張肅獻酬交錯，… 第 123 則

“黃忠、魏延正和川將吳蘭、雷銅交鋒，… 第 127 則 斥候の白

卻說張飛和魏延連日攻打關隘不下。 第 139 則

卻和魏延引數十騎，自來關兩邊哨探小路。 第 139 則

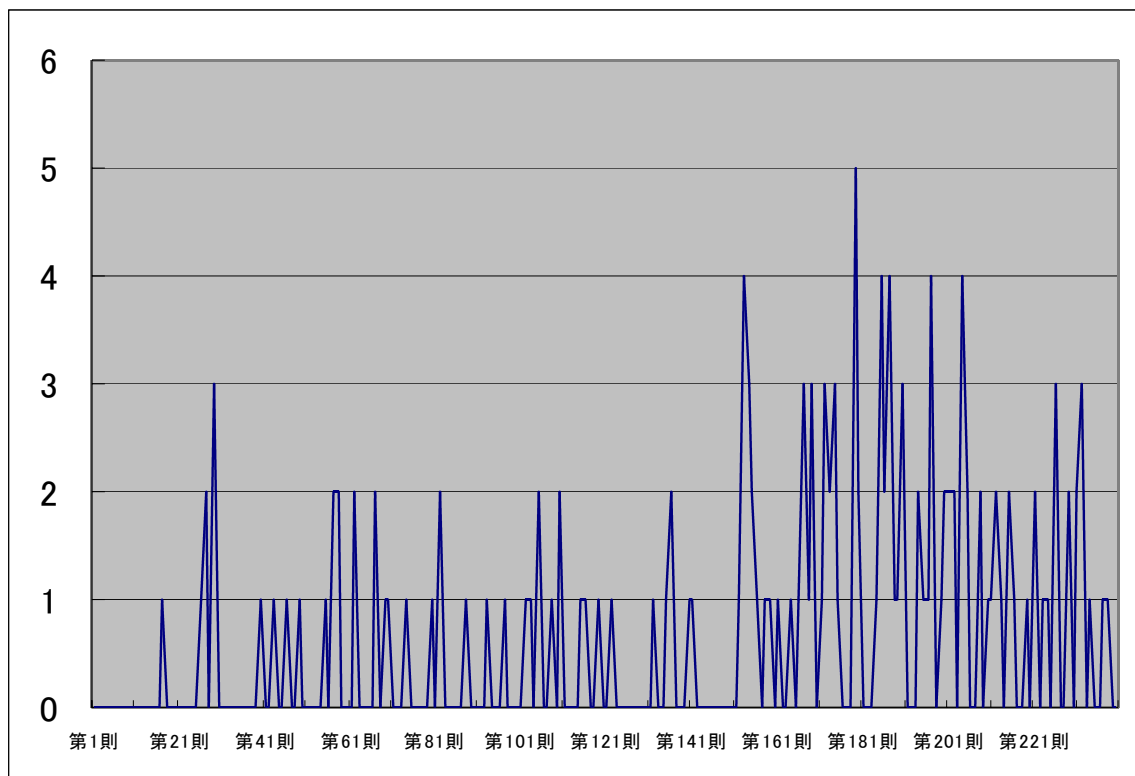
韓浩曰：“我在長沙，足知老賊利害。他和魏延獻了城池，… 第 140 則 韓浩の白

黃忠應允，和法正領本部兵去了。 第 141 則

“丞相若肯放我兄弟回去，收拾家下親丁，和丞相大戰一場，… 第 176 則 孟獲の白
＜後半部に多い例＞

・【**忽然**】嘉靖本に 155 例あるが、うち、前半部には 37 例しかないのに対して後半部には 118 例と 3 倍近くある。元雜劇、『宣和遺事』、『三国志平話』など宋元の口語文学には用例が若干ある。

【嘉靖本における“忽然”の出現回数】



・【**于是**】嘉靖本では 195 例あるが、前半部は 33 例しかなく、後半部の方が 4 倍以上多い。第 100 則より前には僅かに 24 例しかなく、第 170 則から第 180 則の七擒孟獲故事や第 210 則から第 220 則の間には非常に多い。

・【御説】嘉靖本に 754 例にあるうち、前半部が 272 例、後半部は 484 例となっている。出現回数の偏りが大きく、第 201 則から第 205 則には 35 例もあるのに対し、第 16 則から第 20 則には僅か 3 例を数えるのみである。

・【只見】嘉靖本では 124 例あるうち、前半部は 24 例、後半部はその 4 倍の 100 例と非常に極端な分布になっている。特に第 1 則から第 35 則までは用例がない。『水滸伝』には 11 例しかないが、『平妖伝』には対照的に 192 例と出現回数の多さが突出している。

4) 『三国演義』で出現回数の多い文字

『三国演義』の嘉靖本では 4182 種類の文字が用いられているが、その中で出てくる回数が多い文字の上位 20 は以下のようである。

- | | | | | |
|------------|------------|------------|------------|------------|
| 1. 之 11023 | 2. 曰 9852 | 3. 不 7784 | 4. 人 6073 | 5. 軍 5474 |
| 6. 兵 5006 | 7. 大 4745 | 8. 一 4544 | 9. 馬 4309 | 10. 将 4235 |
| 11. 也 4075 | 12. 有 3725 | 13. 来 3681 | 14. 下 3478 | 15. 此 3474 |
| 16. 于 3428 | 17. 而 3352 | 18. 操 3154 | 19. 以 3005 | 20. 中 2979 |

「之」「此」などの代名詞や虚字が多いことは予測できたが、「兵」「馬」「将」「操」などの名詞が上位に食い込んできているのは意外であった（注 16）。そこでこの上位 20 の文字の中から、名詞を除く代名詞、動詞、虚字に着目し、それぞれの文字で出現回数の多い則と少ない則をそれぞれ 3 位まで GPS で検索したところ、以下のような結果となった。

1. 之 11023

上位：第 85 則（144 例 **舌戰群儒**）、第 119 則（118 例 **張永年反難楊修**）、第 79 則（**獻荊州** 116 例）

下位：第 10 則（8 例 **虎牢関三戰呂布**）、第 102 則（9 例 **一氣周瑜**）、第 24 則（15 例 曹操定陶破呂布）

2. 曰 9852

上位：第 38 則（100 例 **白門楼**）、第 17 則（99 例 王允授計誅董卓）、第 119 則（98 例 **張永年反難楊修**）

下位：第 10 則（8 例 **虎牢関三戰呂布**）、第 215 則（15 例 戰徐塘吳魏交兵）、第 96 則（17 例 **曹操三江調水軍**）

3. 不 7784

上位：第 119 則（69 例 **張永年反難楊修**）、第 85 則（69 例 **舌戰群儒**）、第 38 則（66 例 **白門楼**）

下位：第 10 則（8 例 **虎牢関三戰呂布**）、第 12 則（11 例 袁紹孫堅奪玉璽）、第 162 則（12 例 劉先主興兵伐吳）

11. 也 4075

上位：第 85 則（42 例 **舌戰群儒**）、第 79 則（39 例 **獻荊州**）・第 163 則（39 例 吳臣趙咨說曹丕）

下位：第 10 則（1 例 **虎牢關三戰呂布**）、第 16 則（2 例 鳳儀亭）、第 96 則（3 例 **曹操三江調水軍**）

12. 有 3725

上位：第 119 則（51 例 **張永年反難楊修**）、第 178 則（39 例 **五擒孟獲**）、第 211 則（35 例 司馬懿破公孫淵）

下位：第 10 則（4 例 **虎牢關三戰呂布**）、第 102 則（4 例 **一氣周瑜**）、第 74 則（5 例 玄德風雪訪孔明）

13. 来 3681

上位：第 55 則（51 例 **斬蔡陽**）、第 165 則（37 例 劉先主猇亭大戰）、第 54 則（32 例 五關斬將）

下位：第 238 則（1 例 司馬氏復奪受禪台）、第 160 則（2 例 漢中王成都稱帝）、第 213 則（3 例 **司馬懿父子秉政**）・第 230 則（3 例 姜維避禍屯田計）・第 239 則（3 例 羊祜病中薦杜預）

14. 下 3478

上位：第 159 則（62 例 廢獻帝曹丕篡漢）、第 210 則（35 例 **魏拆長安承露盤**）、第 119 則（31 例 **張永年反難楊修**）

下位：第 144 則（3 例 曹孟德忌殺楊修）、第 71 則（4 例 徐庶定計取樊城）・第 91 則（4 例 諸葛亮計伏周瑜）・第 94 則（4 例 龐統進計連環計）・第 236 則（4 例 鄧艾鍾會大爭功）

15. 此 3474

上位：第 178 則（38 例 **五擒孟獲**）・第 55 則（37 例 **斬蔡陽**）、第 119 則（34 例 **張永年反難楊修**）

下位：第 96 則（1 例 **曹操三江調水軍**）、第 10 則（2 例 **虎牢關三戰呂布**）、第 83 則（2 例 斷橋）

16. 于 3428（注 17）

上位：第 85 則（35 例 **舌戰群儒**）、第 169 則（34 例 白帝城先主托孤）、第 207 則（33 例 **秋風五丈原**）

下位：第 43 則（3 例 曹操分兵拒袁紹）・第 44 則（3 例 **關張擒劉公王忠**）・第 143 則（3 例 劉玄德智取漢中）・第 208 則（3 例 死諸葛走生仲達）

17. 而 3352

上位：第 207 則（44 例 **秋風五丈原**）、第 73 則（39 例 三顧草廬）、第 85 則（34 例 **舌戰群儒**）

下位：第 31 則（2 例 轅門射戟）、第 44 則（3 例 **關張擒劉公王忠**）・第 196 則（3 例

三出祁山)

19. 以 3005

上位：第 210 則 (47 例 **魏拆長安承露盤**)、第 85 則 (46 例 **舌戰群儒**)、第 33 則 (41 例 袁術七路下徐州)

下位：第 108 則 (0 例 劉玄德娶孫夫人)、第 168 則 (1 例 八陣図石伏陸遜)、第 10 則 (2 例 **虎牢関三戦呂布**)・第 19 則 (2 例 李傕郭汜殺樊稠)・第 46 則 (2 例 曹孟徳三勘吉平)・第 68 則 (2 例 襄陽会)、139 則 (2 例 瓦口張飛戦張郃)

20. 中 2979

上位：第 182 則 (35 例 孔明初上出師表)、第 119 則 (33 例 **張永年反難楊修**)・第 179 則 (33 例 六擒孟獲)

下位：第 42 則 (1 例 関雲長襲斬車胄)・第 47 則 (1 例 曹操勒死董貴妃)・第 56 則 (1 例 古城聚義)

重複して出てきた則目についてはゴチックにしてあるが、興味深いのは、上位 3 位までにランクインし、かつ重複している則目としては「張永年反難楊修」「舌戰群儒」「白門楼」「五擒孟獲」「斬蔡陽」などがあり、一方、下位 3 位にランクインしかつ重複があるものとしては、「虎牢関三戦呂布」「曹操三江調水軍」「一氣周瑜」などがあることである。

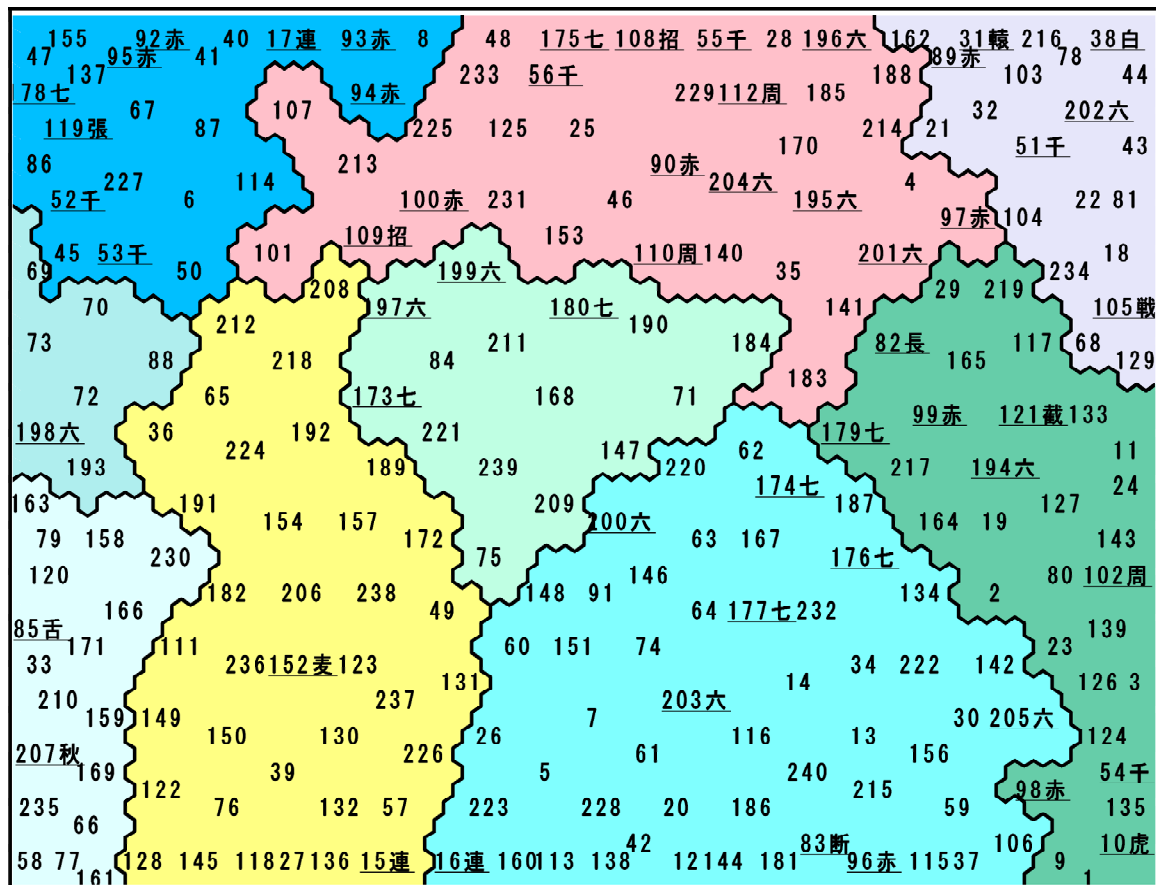
以上の分析は各則における出現回数を単純に数えたものであるが、嘉靖本は則によって文字数にばらつきがあるため、出現回数が多くても必ずしも出現する頻度が高いとは限らない。そこでやはり GPS を用いてそれぞれの則の文字数で出現回数を割って出現率を算出した上で、そのデータを統計処理プログラムにより解析してみた結果、できあがったのが次のマップである (注 18)。

マップの見方であるが、全 240 則を 9 つのクラスタに分割するのが適当とプログラムによって判断されており、このマップに関しては左側に寄るほど今回変数に指定した「之」「曰」「不」「也」「有」「此」「于」「而」「以」の出現率が高くなるよう設計している(「来」「下」「中」の 3 字については Component ピクチャの分布が他の文字を変数とした場合と異なるため、他の変数とは負の相関があると判断し、変数選択から除外している)。また則と則の間の距離が短いほど近似性が高いということになる。

個々の文字についてその分布をチェックしてみると、左上のクラスタには「曰」「不」「有」「此」の出現率が高い則が集まっており、左中には「不」「也」「而」、左下では「之」「也」「以」の出現率が高い則が多く集まっている。仮にこのマップを二分割するとしたら、右上・右中・右下と中上の 4 つのクラスタが 1 つになり、左上・左中・左下と中中・中下のクラスタが 1 つになる。

物語と各クラスタの関連性をイメージしやすくするため、代表的な物語を含む則については下線を引き、物語の略号を付したが、これを見ると、左上にはこれらの文字の出現回数も多かった第 119 則「張永年反難楊修」や、赤壁鏖兵、千里独行故事を含む則がある。

【クラスター文語の虚字等 9 字の出現率で分析した結果】



10虎…虎牢関三戦呂布 15-17連…連環計 31轅…轅門射戟 38白…白門楼

51-56千…千里独行 73-75草…三顧草廬 82長…長坂坡 83断…断橋 85舌…舌戦群儒

89-100赤…赤壁鏖兵 102・110・112周…三気周瑜 105戦…戦長沙 108・109招…劉備招親

119張…張永年反難楊修 121截…截江奪斗 152麦…走麦城 173-180七…七擒孟獲

194-205六…六出祁山 207秋…秋風五丈原

また、左下にはやはり出現回数でも上位に来る舌戦群儒の第 85 則、秋風五丈原の第 207 則が見える。右側に目を転じると、右上には第 31 則や第 38 則の呂布故事、千里独行、赤壁鏖兵、戦長沙などを含む則も見える。また、右中には出現回数の下位で重複する第 10 則の「虎牢関三戦呂布」や長坂坡、截江奪斗など有名な物語を含む則が集まっている。また、中中のクラスタを中心にこのマップの中央に七擒孟獲、六出祁山の物語を含む則が集まっているのも興味深い。

今回変数に選んだ、嘉靖本の中で出現回数の多い「之」「曰」「不」「也」「有」「此」「于」「而」「以」の 9 文字は、いずれも規範的な文語文を書く際の常用漢字であることからすると、「張永年反難楊修」などの物語は平易な文語調の文体であり、マップ上で「張永年反難楊修」の第 85 則とは対角線の反対に位置する第 10 則の「虎牢関三戦呂布」などはそうした文語文の常用漢字を避けた文体と言えるであろう。

4. 結論

計量的な手法を用いた『三国演義』の文体解析は緒についたばかりではあるが、以上で明らかにできたことは、

(1) 特定の物語に特定の語彙や語形が使われている（篇末の表「嘉靖本に現れた23の語彙・語形と物語との関係」参照）

これは来源の異なる物語を羅貫中があまり手を入れずに『三国演義』に移植した結果であろう。従来から指摘されていた以上に、『三国演義』は文体の統一がとれていないこともはっきりしてきた。香坂氏が指摘するように登場人物によっての言葉の使い分けはもちろん見られるが、張飛と同じ口語的表現を孔明や周瑜が口にしてしていることも多い。また、知識人の対話を主とする「張永年反難楊修」や「舌戦群儒」と、戦いが多い「虎牢関三戦呂布」や「白門楼」とでは使われる言葉の性格が異なることは理解できるが、同一人物が筆を執っていてここまで極端に用いられる常用漢字が変化するとは考えにくい。

このほか、言葉の面から見て、『三国演義』と元代の『三国志平話』との共通点が意外に少なく、元雜劇で常用される語彙がそれほどたくさん使われている訳ではないことも確かめられた。更に明代以降に常用されるようになった語彙、語形が一部に入り込んでいることから、羅貫中は元の『三国志平話』をそのまま引き写すのではなく、それを自分の言葉で書き換えたか、あるいは明代に書かれた今に伝わらない三国故事の話本、唱本を参照していたかもしれない。

(2) 前半部と後半部とで文体の差異があり、文言がより多く用いられている後半部は羅貫中自身が書いた可能性が高い

『三国演義』の中で有名な物語はほぼ第152則の関羽の死（走麦城）以前に出揃っているが、これらの物語は少数の例外を除いて『三国志平話』にその話柄を探し求めることができ、言葉の面でもすでに見てきたように元明の口語的な語彙、語形が散見される。一方、関羽の死後は七擒孟獲、六出祁山、秋風五丈原などを別にすれば知名度の高い魅力的な物語が不足しており、文体は通俗的な文言が基調となっている。これは、『三国志平話』では関羽の死後以降の叙述が簡略であることと関係があるであろう。『三国演義』の第1則から第152則、第153則から第240則、第207則から第240則の部分に相当する『三国志平話』の叙述の字数を、該当する『三国演義』の則数で割り、『三国演義』1則分を執筆するのに利用できた平均の『三国志平話』の字数を算出してみたのが以下の表である。

	『三国演義』の則数 (A)	『三国志平話』の字数 (B)	(B) / (A)
第1則～第152則 (関羽の死)	152則	57906字	380.96
第153則 (関羽の死)～第240則	88則	9563字	108.67
第207則 (孔明の死)～第240則	34則	943字	27.73

場合、千里独行故事と長坂坡故事が左下で独立したクラスタを形成しており、その対角線上の右上には七擒孟獲、六出祁山の則が集まったクラスタができていて、同一の物語を共有する則がまとまりを見せている。今後はより特徴的な語彙、語形を見つけ出すことによって更に精度の高いマップに塗り替えることが可能であろう。

また、今回は手が及ばなかったが、小論で試みたように『三国演義』以外の中国古典小説の電子テキストデータを GPS や自己組織化マップで解析することにより、小説内部の構造や文体の特徴が見えてくる筈である。また小説を計量的に比較することで、今まで人間が読んだときには意識されなかった親疎関係や継承関係が浮き彫りになる可能性があるが、これは各種の小説の電子テキストの整備を待つことにし、今後の課題としていきたい。

【注】

1. 上田望「日本の中国古典小説研究はどこへ向かうのかー 20 世紀末の小説研究の来し方を振り返りつつー」（アジア研究情報 GATEWAY 文学・言語 2003/10/14）参照。
http://asj.ioc.u-tokyo.ac.jp/html/asw_bg.html
2. 中国古典小説に関する電子テキストを用いた日本国内外の計量的研究については「2. 研究史と問題意識」で言及しているが、欧米文学研究や日本文学研究の研究分野では計量言語学の手法が早くから導入されており、最近の研究では以下の諸論考が参考になった。
 村上征勝、今西祐一郎「源氏物語の助動詞の計量分析」（『情報処理学会論文誌』Vol.40 No.3 1999）
 伊藤雅光『計量言語学入門』（大修館書店 2002）
 村上征勝『文化を計るー文化計量学序説ー』（朝倉書店 2002）
 ダグラス・バイバー他共著、齋藤俊雄他共訳『コーパス言語学ー言語構造と用法の研究ー』（南雲堂 2003）
 村上征勝『シェークスピアは誰ですか？ー計量文献学の世界』（文春新書 406 2004）
3. 周策縦「多方研討《紅樓夢》ー編者序ー」（周策縦編『首届国際《紅樓夢》研討会論文集』中文大学出版社 1983）p.3 参照。周氏に拠れば、1964 年にまず黄傳嘉という学生が統計的な手法とコンピューターを用いて『紅樓夢』の二十数個の感嘆詞と助詞を調査し、前 80 回と後 40 回の作者の問題について推論を立てたとあり、またそれより少し後に、大学院生だった陳炳藻氏がより複雑な統計方式とコンピューターを使って二十数万以上の語彙の出現率を算出して博士論文を執筆し、その概要は第 1 回の国際『紅樓夢』研討会でも発表されたと述べている。陳氏の論考については、『首届国際《紅樓夢》研討会論文集』に同氏が提出した論文摘要が収録されておらず未見であるが、前半部と後半部は同一の作者の手になるという結論であるらしい。劉鈞傑「《紅樓夢》前八十回与後四十回言語差異考察」（吳競存編『紅樓夢の語言』北京語言学院出版社 1996）p.42 の注釈①を参照。
4. 李賢平「『紅樓夢』成書新説」（『復旦学報（社会科学版）』1987 年第 5 期）参照。

5. 注2 前掲劉氏論文参照。
6. 伊原大策『『水滸伝』語彙計量分析試論—語彙・語法史研究におけるパソコン応用の試み—』（『筑波中国文化論叢』10 1991）参照。同論考は著者も断っているように、『水滸伝』全体の約五分の一を考察したに過ぎず、また「求める語彙・語法を高速且つ正確に文脈付きで検出できるコンピューター索引を作る」ことにも成功していないが、統計的手法によって各故事間の均質性・不均質性を客観的に浮き彫りにして見せたという点で非常に画期的な研究であり、多くの示唆を受けた。
7. 佐藤晴彦「容與堂本『水滸伝』成立の一側面」（『神戸外大論叢』50—5 1999）参照。同氏にはやはり文字表記の側面から小説の刊行時期について考察しようとした『三遂平妖傳』は何時出版されたか？—文字表記からのアプローチ』（『神戸外大論叢』53—1 2002）という興味深い論考もある。
8. 小松謙、高野陽子『『水滸伝』成立考—語彙とテクニカル・タームからのアプローチ—』（『中国文学報』65 2002）参照。
9. 『三國演義』（上海亞東圖書館 1922）p.7 参照。
10. 香坂順一「《三國演義》のことば」（『中国の八大小説』所収 平凡社 1965）参照。
11. ボリス・リフチン（李福清）「中国歴史演義中的文体問題」（『漢文古小説論衡』所収 江蘇古籍出版社 1992）、中川論「『三國演義』版本の研究—毛宗崗本の成立過程—」（『集刊東洋学』61 1989）、上田望「講史小説と歴史書（1）—『三國演義』、『隋唐兩朝史伝』を中心に—」（『東洋文化研究所紀要』130 1996）を参照。
12. 竹内真彦「『三国志演義』における関羽の呼称」（『日本中国学会報』第53集 2001）参照。
13. 周文業主編『三國演義電子資料庫』（北京国学時代文化傳播有限公司 2003）
14. 宋元及び明清の語彙、語形については以下の諸論考、索引、データベースを参考にした。
 太田辰夫『中国語歴史文法』（江南書院 1958）
 龍潜庵著『宋元語言詞典』（上海辭書出版社 1985）
 胡竹安著『水滸詞典』（漢語大詞典出版社 1989）
 程湘清編『宋元明漢語研究』（山東教育出版社 1992）
 渡辺浩司「「全相平話」のことば—『新刊全相秦併六國平話』篇」（『言語文化部紀要』32 1997）
 大島吉郎編『容與堂本水滸伝語彙索引』（近代漢語研究会 1998）
 顧之川著『明代漢語詞匯研究』（河南大学出版社 2000）
 馮春田『近代漢語語法研究』（山東教育出版社 2000）
 中央研究院漢籍電子文獻（小説戯曲其他）<http://www.sinica.edu.tw/ftms-bin/ftmsw3>
15. 石昌渝「『水滸伝』成書于嘉靖初年考」（『明代小説面面觀』所収 学林出版社 2002）参照。石氏は『水滸伝』で描かれる「土兵」は地方の治安維持にあたる白州役人のような存在であることから、宋代の「土兵」ではなく明代正徳年間以降の「土兵」であるとし、よって『水滸伝』の成立は明弘治年間よりも前ではありえないとしている。

16. 朱岩著、千田大介訳「中国古籍における文字出現頻度および分布に関する統計と分析」(『漢字文献情報処理研究』第5号) pp.13-14 参照。
17. 嘉靖本の原本では「於」と表記される文字は、前述の周文業氏の電子テキストでは「于」に統一されて入力されており、「于」で検索すると人名の「于吉」があるために第57則と第58則が突出するのでこれらの則は除いた。
18. 筆者が今回、使用したプログラム Viscovery® SOMine はクラスタリングの1手法である自己組織化マップ(SOM: Self-Organizing Maps)のコンセプトとアルゴリズムに基づいており、ニューラルネットワークを使用して複雑なデータを、その類似に基づいて配置し、データの特徴をマップで可視化してくれる。

謝辞

本研究に当たって、金沢大学文学研究科修士課程の大学院生であり、PLATEA.Incの社長でもある林智氏には「Grammatical Pattern Scanner for 三国演義」(PLATEA.Inc)のプログラムの設計、『三国演義』の中で出現回数の多い文字を計算するための MonoGram を取るアルゴリズムのプログラム設計を委託し、自己組織化マップの利用法についてもいろいろと教えていただいた。ここに記し、感謝の意を表する次第である。

【嘉靖本に現れた23の語彙・語形と物語との関係】

	呂布故事 (連環計)	千里獨行 (古城祭義 斬蔡陽)	三顧草廬 博望燒屯	長坂坡	赤壁慶兵 (草船借箭 祭東風 華容道)	劉備招親 截江奪斗	取西川 (義釋嚴顏)	取漢中 (定軍山)	水滸七軍 走麦城	七擒孟獲	六出祁山 秋風五丈原
辱没(1)						①					
兀的(2)		①	①								
委實(2)		①(黄)		①							
下落(6)		④		②							
去處(24)		①			①	②	③	⑥	②	②	
便了(12)		①	②		①				①		
半點(7)				②							
會(10):助動・動詞									②		④
好生(9)	②	①		①		②	①		①		
A也不A(7)			②		②						①
只管(7)		①						①(葉)			③
沙場(5)		①		①		①					
事故(7)	①		①	①					①		
健將(13)	⑤			①							
一切(13)					①	①			①	③	①
人伴(8)		⑧									
喫了一驚(6)					①	③					
險些(4)		①			①(黄)						
士兵(1)									①		
白糧(1)									①(葉)		
軍政司(1)					①						
喫(12):動詞	③				②		④				
和(30)(介詞・共同)	③				①	②	⑤			①	

* ()内の数字は総出現回数